優秀賞　〈高学年の部〉

音がなくても

鹿児島県　知名町立下平川小学校　六年
奥野　颯揮

「・・・。」

ぼくはじいちゃんへ「ありがとう」の感謝の気持ちを伝えた。

ぼくのじいちゃんは聴覚障がい者だ。母はいつもじいちゃんと話すときは手話を使ってくれている。

じいちゃんは、ぼくや妹に勉強を教えてくれる。紙に公式を書いたり、歌を歌ってくれたりしてくれる。音が聞こえなくてしゃべりにくそうだけど、歌ってくれる。

食事にも連れて行ってくれる。じいちゃんがメニューを見せて料理に指をさす。注文するときや店員さんに話すときは、ぼくの担当だ。だけど、そんなことは気にならない。いつも食事に連れて行ってもらってすごく感謝している。

「この料理、おいしい」と、じいちゃんに伝えたいとき、母から手話を教えてもらって伝える。口の動きも大事だから、分かりやすく口を動かす。じいちゃんは口の動きでも会話の内容が分かるんだ。

じいちゃんはもともと耳が聞こえた。でも小学生のときに木登りをしていたら落ちてしまって、そのときから耳が聞こえなくなったみたいだ。つらかったという話も聞いた。もしぼくが、耳が聞こえなくなったら、ぼくの大好きな歌が聞けなくなって、かなりつらい気持ちになるだろう。あきらめなければならないものもでてくると思う。

ぼくはじいちゃんの住んでいる沖永良部島に、幼いときに引っ越してきた。ぼくはそれまで障がいをもっている人との交流がほとんどなかった。だから、最初はじいちゃんとの会話ができなくてとまどった。手話ができる母を通しての会話だったから、じいちゃんと直接話がしたかった。だけど、じいちゃんと会う時間が増えていくなかで、少しずつ手話を覚えたり、口や身振り手振りを工夫したりして思いを伝えられるようになった。

ぼくは、じいちゃんとの時間を通して、人間にはいろんな生き方があるんだということを受け入れることができるようになった。人を大切にしたいと思った。こんな考えをもてるようになったのも、じいちゃんのおかげだ。感謝したい。

じいちゃんに日頃の感謝の気持ちを伝えた。手話はなんだか照れくさかったので、口を大きく動かして「ありがとう」と伝えた。じいちゃんは、最初は驚いていたけれど、喜んでいる様子だった。じいちゃんは照れているみたいで、作っていたたこ焼きを早く作るようにせかしていた。そんなじいちゃんの姿を見て、ぼくもうれしくなった。

音では伝えられないけど、ぼくとじいちゃんはつながることができる。

これからもじいちゃんに届けたい。

音のない「ありがとう」を。